

序 章

イスパニョーラ島研究事始め

尾 尻 希 和



サトウキビから汁を搾り出す機械の展示（ハイチ農村），家畜を使って動かしていたもの（2015年筆者撮影）

はじめに

ドミニカ共和国とハイチ。カリブ海のイスパニョーラ島を分け合う、さまざまな点で対照的な二国である。本書が誕生することになったきっかけは「小さな島になぜ二つの国家が建国されたのか、そして、そのひとつの島を分け合う両国が、なぜこのように異なる特徴をもつことになったのであるのか」という素朴な疑問であった。「イスパニョーラ島」は、カリブ海のなかでもキューバに次いで2番目に大きな島で、北海道よりやや小さいサイズとなっている。島国が多いカリブ諸国では、海岸線がいわば「自然の国境線」となっているのがほとんどであるが、イスパニョーラ島には二つの国家が存在するため、カリブでは珍しく陸上に国境線が存在する。この島の東部3分の2を占めるのがドミニカ共和国（人口は1065万人）であり、西部3分の1を占めるのがハイチ共和国（人口は1089万人）である。両国とも正式名称に「共和国」がつくが、カリブには日本の対馬と同じくらの大きさの島国「ドミニカ国」が別に存在しているため、これと区別するためにイスパニョーラ島のドミニカには「共和国」を常につけることが慣例となっている。ドミニカ共和国は過去にはスペインの植民地であり、またハイチはフランスの植民地であったが、現在は独立し別々の国家が樹立されている。

コロンブスが1492年に到達して以降、カリブ海の島々はスペイン領とされていた。しかし遅れて進出してきたイギリスやフランスのたび重なる侵入をスペインは完全に排除することができず、フランス人の存在を既成事実とする形でイスパニョーラ島はフランス領とスペイン領に分割された。その後紆余曲折を経て、それらフランス領とスペイン領をもとに現在のハイチとドミニカ共和国が建国された。

その両国の現状は対照的である。まず政治的には、1990年代にドミニカ共和国で民主化が実現し、現在まで安定した政治体制が続いている。これに対して、ハイチは2015年10月に行われた大統領選挙第1回投票の結果が「信用できない」として2016年11月にやり直しの投票が行われるな

ど、政治的不安定が続いている。世界各国の民主主義の度合いを数値化して「自由指標」として発表しているフリーダムハウスによると、2015年のドミニカ共和国の評価は「自由」（民主主義）であったのに対して、ハイチは「部分的自由」（不完全な民主主義）にとどまった（Freedom House 2015, 22）。

また、社会経済的にも両国は対照的である。ドミニカ共和国は1990年代に中進国の仲間入りを果たしたのに対して、ハイチは1950年代の観光業の一時的な勃興による「黄金時代」を最後に低開発に苦しみ、ラテンアメリカの最貧国となった。具体的には、世界各国の生活水準を数値化して「人間開発指標」として発表している国連開発計画（UNDP）によると、2015年のドミニカ共和国の人間開発の度合いは「高い人間開発」という分類に該当していたのに対して、ハイチのそれは「低い人間開発」に分類された。ハイチ出身の作家ダニー・ラフェリエール（Dany Laferrière: ハイチ出身でカナダ在住）の著作にも、ハイチの貧困や格差の実態が折に触れて語られており、「この国では病院に行くのは、痛みに耐えられなくなった時である。そうでなければ、病人と認められない。（中略）病気は、資力のない人には許されない贅沢なのだ」（ラフェリエール 2011, 123）。

このようにハイチとドミニカ共和国は、政治状況と社会経済状況に大きな開きがあるだけではなく、両国間関係もまた厳しいものがある。ハイチに10年以上在住したある米国人のジャーナリストは両国の関係を地球と月との関係にたとえて「月の裏側のように遠い」と表現した。ご存じのように、地球と月は常に一緒に太陽の周りを回っているが、月は常に同じ面を地球に向けており、その裏側の姿は1960年代に宇宙探査機によって観測されるまで人類には未知のものであった。

ドミニカ共和国とハイチは同じイスパニョーラ島を分け合っているにもかかわらず「地球と月の裏側のように遠い」とはどういうことなのだろうか。第1に、両国は独立する以前の宗主国がそれぞれスペインとフランスであり、言語的、文化的にまったく同じというわけではなかった。ドミニカ共和国ではスペイン語が話されており、ハイチではフランス語とクレオール語（ハイチ語）が話されている。第2に、「奴隷解放と世界初の有

色人種による植民地からの独立」を果たしたハイチ（1804年）に対して、スペイン領だった現ドミニカ共和国側では、独立も奴隷解放も主流の運動とはならず、奴隷解放がハイチによる征服によってなされるという始末であった。結局、ドミニカ共和国の独立はハイチという征服者からの独立という形で達成され（1844年）、ハイチからの独立を達成した軍人らが現在でも国の英雄として讃えられている。つまり、ドミニカ共和国にとってハイチは愛国心を刺激される「仮想敵国」ともいえる存在なのである。

第3にこれと関連して、世界で初めて自身で奴隷解放を成し遂げ、アフリカ人の血と文化を受け継いでいることを誇りとするハイチに対して、ドミニカ共和国では国民の大多数がアフリカ人の血を受け継ぎながらも、スペイン人の血と文化を受け継いでいることを誇りとしている。第4に、両国間に横たわる経済格差の結果として、数十万人ともいわれるハイチ人およびハイチ系住民が高い賃金を求めてドミニカ共和国で働いており、両国間の摩擦の要因となっている。1937年にはドミニカ共和国のトルヒージョ大統領の命令で国境地帯のハイチ人が数万人規模で殺害される事件が起こったが、この事件は国境地帯の「ハイチ化」を危惧するドミニカ知識人の訴えが背景にあったとされ、両国間の移民問題の歴史は長い。このような、両国においては双方に親近感を抱かない国民が多数である状況が「月の裏側のように遠い」と評される所以なのである（Diederich 2008, 260）。

ひとつの島を分け合うドミニカ共和国とハイチの比較研究は、ともすればカリブ最大の島であるキューバ一辺倒になりがちなカリブ研究に一石を投じる試みであるが、両国の発展経路を比較し、その結果を説明しようとした研究者がこれまでにいなかったわけではない。そのなかで日本人に最も広く知られている研究者は、『銃・病原菌・鉄』の著者ジャレド・ダイアモンドであろう。彼は自然環境が文明に決定的な影響を及ぼすという観点から古代文明をマクロ的に研究している（『文明崩壊』）。ダイアモンドの文明崩壊論は古代文明の衰退を環境破壊によって説明しており、現代の世界規模の環境破壊に警鐘を鳴らすものとして国際的に評判となった。彼が古代文明の衰退過程を自然環境によって説明したのは、ほとんど文字が残されていない古代文明については、およそ自然環境に依拠することによ

でのみ論理的な説明が可能であるとの理由からである。

ハイチとドミニカ共和国についてダイヤモンドは、非常に短い論説ながら「国境の自然実験」論を使って両国の発展経路がどのように分岐してきたかについて、自説を展開している (Diamond and Robinson 2010)。具体的には、ハイチのほうが乾燥しており、肥沃さが劣るといったように、自然環境がもともと不利であったところに、宗主国によって砂糖産業が導入され環境が破壊された。そこに開発に無関心な独裁者による支配という悪条件が重なったために、低開発に苦しむ結果となったのだという。つまり、『文明崩壊』で展開した議論をハイチの低開発の説明にも用いているのである。また「国境の自然実験」という考え方自体が刺激的である。環境を完全にコントロールするような実験が通常はできない社会科学の分野で、たまたま国境線によって遮断された環境が生まれると、それ以後の発展過程のちがいをつぶさに観察することによって、まるで自然科学のような実験を行うのと同じようなことができるという主張にも説得力がある。そして、その分析対象として、同じ島を分け合うドミニカ共和国とハイチは最適なものに思われる (Diamond 2010, 120-141)。

しかし、ダイヤモンドの「国境の自然実験」論が有効なのは、文字による歴史の記録がなく、詳細を「推定」に委ねるしかない地域であって、歴史がしっかりと文字で残されているハイチとドミニカ共和国の発展のちがいを、気候や土壌などの自然環境を中心に論じることには無理がある、との立場を本書はとる。また、既存の気候や土壌で文明の発展や末路がほぼ規定されてしまうという議論は、アカデミズムでは「決定論」と呼ばれ、将来における成長の可能性をすべて否定することにつながり、しばしば批判的となる考え方であることに注意する必要がある。そこで以下では、文字資料や現地での調査を中心に、ハイチとドミニカ共和国の歴史・社会・政治・経済・文化を取り扱う。

ダイヤモンドの分析方法との大きなちがいは、「国境の自然実験」を念頭におきつつも、それをアンチテーゼとして受け止め、事前の所与条件ではなく人間の行動に目を向けるということである。ドミニカ共和国とハイチの現状のちがいを把握しつつ、統治者、政治家、社会運動家、知識人、

企業家，外国政府の代表，一般大衆など多様なアクターの相互関係に注目して両国の発展経路の分岐点を明らかにする。同時になぜイスパニョーラ島には二つの国家があるのかという問いに答えていきたい。以後第1章からは開発経済学，比較政治学，マクロ経済学，福祉国家論，国際関係論の専門家がそれぞれの手法にもとづいてドミニカ共和国とハイチを分析している。さらに，これら両国を見れば開発経済学がわかる，比較政治学がわかる，マクロ経済学が，福祉国家論がわかる，そして国際関係論がわかる，というふうに，事例を通じてそれぞれの方法論について理解を深めてもらうことも本書はめざしている。

第1節 ハイチとドミニカ共和国について

本書の構成を紹介する前に，ハイチとドミニカ共和国という，日本ではなじみが薄い国々について読者が身近に感じる分野から紹介し，両国の歴史をざっと振り返っておきたい。まずドミニカ共和国といえば，日本のプロ野球で活躍している選手も多く，カリブ諸国のなかでは日本人にとって身近な国のひとつであろう。2014年のシーズンの打点王となった阪神タイガースのマウロ・ゴメス選手のほか，中日ドラゴンズ時代にベストナインに選ばれたエクトル・ルナ選手（2016年に広島東洋カープに移籍）らが有名である。カリブ出身のプロ野球選手は，日本でも米国でもドミニカ共和国出身の選手で多くが占められてきており，ドミニカ共和国の主要な「輸出品」が野球選手であることは広く知られている。

ハイチについては日本で活躍している有名ハイチ人が存在しないため，あまり身近に感じている日本人はいないかも知れない。しかし2010年に，不幸なことにハイチで30万人の命が犠牲になった大地震が起これり，その震災が日本でも連日報道された。そのハイチ地震の国際的な復興支援には日本も大きくかかわったことは特筆すべきであろう。医療や食糧など1億4000万ドルを超える緊急支援のほかに，国連平和維持活動（United Nations Peacekeeping Operations: PKO）の一環として震災翌月の2010年2

月から2012年12月までおよそ3年間、のべ2200名の自衛隊員が瓦礫除去や道路舗装などに従事した。撤収時には機材の一部をハイチ政府に譲与したうえ、機材の操作教育も自衛隊によって行われた。

2011年に日本で東日本大震災が起るとハイチ大地震が日本のメディアにも取り上げられ、ハイチ大地震を現地で体験した小説家ラフェリエールが著した『ハイチ震災日記』が日本語で翻訳出版され、本人が訪日して講演を行うなど、ハイチと日本の民間レベルでの親交が深まった。同書ではラフェリエール自身が目にした震災の光景が、読む者の心を打つような描写で語られる。地震で建物が崩壊していくさまは「低いうなり声を立てて建物が跪いていく」。建物の崩壊にともなう粉塵の発生については「さきほど空に浮かんだ塵は、われわれの夢が粉微塵になってできた雲なのだ」(ラフェリエール2011, 29)。

さらに、地震直後からハイチになだれ込んできたNGOなどの援助の矛盾に関する指摘は的確であり、「穿った見方かもしれないが、今回ハイチに溢れるほど集まった人々(誰もが有名になった負傷者の病床のそばにいたがるのだが)の多くは、それが組織にしる、個人にしる、自分たちを宣伝することしか考えていない」と評している(ラフェリエール2011, 185)。彼は援助する側を批判的にみているだけでなく、援助される側にも同様に厳しい目を向ける。「問題は、第三世界の人々が、時を経るとともに、生活保護を受ける者のメンタリティーをすっかり身につけてしまったことである」(ラフェリエール2011, 207)。

またハイチについては、世界史を勉強した人には1804年に「世界で初めて有色人種として植民地から独立した国」として知られている。米州においては米国に次いで2番目に早い独立であった。このハイチ革命については1938年にC.L.R. ジェームズ(C.L.R. James)が『ブラック・ジャコバン』を著しており、日本語にも翻訳されている。それまでハイチ革命を扱った歴史書は、黒人と白人の混血であり現在ではハイチにおけるエリート階級とされる「ムラート」が果たした役割を中心的にとりあげたものしかなかったが、『ブラック・ジャコバン』は奴隷たちがハイチ独立に果たした役割を中心に分析しており、現在に至るまでハイチ革命の名著として

読み継がれている。

そもそも、ハイチとドミニカ共和国に黒人や、黒人と白人の混血である「ムラート」が多数存在しているのは、サトウキビの栽培と砂糖の製造に従事させるためにアフリカから奴隷が多数連行されたことに起源がある。コロンブスが1492年にイスパニョーラ島に到達した時からヨーロッパ人による同島への植民が開始されたが、先住民はヨーロッパ人による使役による過労やヨーロッパ人が持ち込んだ疫病により瞬く間に絶滅したと推定され、労働力が大幅に不足した。砂糖は当時たいへんな貴重品であり、高値でヨーロッパに輸出され、ヨーロッパ人に莫大な富をもたらしたが、竹に似た固い植物であるサトウキビを収穫し、その絞り汁を煮詰めて砂糖を製造する工程は、奴隷たちの犠牲のもとで成り立っていた。映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』で知られるようなカリブの海賊の間で広く親しまれていたラム酒は、このサトウキビの絞り汁を原料としている。ラム酒といえば「カリブの楽園」「欧米人に大人気のビーチ・リゾート」につきもののカクテルの原料というイメージだが、お店でラム酒やラム酒を使ったカクテルを注文するときには奴隷たちの苛酷な境遇に思いをめぐらせるのもいいだろう。

その後、東南アジアでサトウキビ栽培が盛んとなったほか、寒冷地で栽培可能なサトウダイコンからも砂糖を製造する技術が確立され、砂糖の価格は劇的に安価となった。フランス領だった島の西部が19世紀初頭に独立し現在のハイチとなり、スペイン領だった東部が19世紀半ばにドミニカ共和国となった。しかし両国の砂糖産業は遠心分離機などの最新の技術を導入することができず、その後のカリブの砂糖産業の中心的地位はキューバに譲ることとなった。そして独立したハイチとドミニカ共和国に残されたのは、旧式の砂糖産業に依存する経済構造であった。

ハイチとドミニカ共和国両国においては、以上のような「モノカルチャー経済」（ひとつの輸出品に依存する経済体制）のほかに、地域大国である米国や軍部による政治介入とその結果としての不安定な政治という共通点もあった。米国は「モンロードクトリン」の名のもとに、ヨーロッパ諸国のラテンアメリカ（カリブを含む）諸国に対する介入を牽制しつつ、

ラテンアメリカを自身の勢力圏に取り込んでいった。その方法は時に武力をとまなうものであり、中央アメリカ諸国やカリブ諸国の政治的不安定（内戦や内乱）に乗じて海兵隊を送り込み、1915年から34年まではハイチを、そして1916年から24年まではドミニカ共和国を占領統治した。占領統治が解かれた後は、1965年にはドミニカ共和国に、1994年にはハイチにふたたび米軍が上陸することになるが、逆にいえばそれまでの期間、米国の直接的介入というのは避けられたということになる。

しかし両国が米軍による軍事介入を長期にわたって避けられた期間は、奇しくも独裁政権によって政治的「安定」（内戦がない状態）が達成された時期とほぼ一致する。ハイチのデュバリエ父子政権（1957～1986年）とドミニカ共和国のトルヒージョ政権（1930～1961年）は、いずれも強固な一党体制を敷いて野党の活動を厳しく取り締まったが、冷戦の枠組みのなか、両独裁者は「共産主義者を取り締まる」という名目であらゆる民主化運動を弾圧したため深刻な人権侵害が横行することになり、多くの国民が命を失ったのである。

第2節 本書の構成

以上のように、イスパニョーラ島を分け合うハイチとドミニカ共和国には社会経済構造や政治体制、さらには大国の直接介入にさらされてきた経験など、共通点が非常に多いといえる。しかし両国の境遇が似ていたのは1950年代までであった。その後、両国においては、開発に対して対照的な態度をとった長期独裁体制を経て、1990年代までにドミニカ共和国は経済的には中進国、政治的には安定した民主体制となり、それに対してハイチでは独裁は倒されたものの、安定とはほど遠い体制となり、経済も疲弊して国民生活は苦しい状態が続いている。1950年代までほぼ同じであった両国の社会経済情勢が、その後どのようにして分岐していったのか。本書の構成は、まず第1章、第2章、第3章で開発、政治、経済のそれぞれの面での両国の異なった現状、第4章で二つの国が現在大きく異なってい

る現状について検討し、第5章で二つの国に分かれた歴史的経緯、ハイチとドミニカ共和国の関係および米国との関係について取り上げ、最後に終章で議論をまとめるものとする。各章の内容は、以下のとおりである。

第1章は「開発—長期的発展経路と決定的な分岐—」と題して、開発経済学の視点から長期発展経路と決定的な分岐（critical junctures）という構図を用いてハイチとドミニカ共和国の発展を比較する。その目的は第2章と第3章が論じる現代ハイチにおける政治的な不安定性と「貧困の罨」、ドミニカ共和国における民主体制の定着と経済成長（「中所得国の罨」という政治的・経済的な相違に歴史制度的な説明を加えることにある。第2章は「政治—政治体制比較と政治発展過程—」と題して、独裁政権とポスト独裁時代の政治体制を比較分析し、両国の政治的安定・不安定の要因を探る。そこで明らかにされるのは、両国の政治発展過程では政治体制や経済体制についての根本的合意をめぐる対立があったが、ドミニカ共和国ではその対立が解決されつつあるのに対して、ハイチではその合意がない状態が続いているということである。

第3章は「経済—ハイチの停滞とドミニカ共和国の成長—」と題し、マクロ経済学の経済成長と経済の安定という視点から、ハイチとドミニカ共和国の経済を、統計資料を使いながら比較する。ハイチは経済が停滞し、低所得国であるのに対して、ドミニカ共和国は成長を遂げ、中所得国になっていることを指摘する。第4章は「社会政策—人々の暮らしと保障—」と題し、ドミニカ共和国とハイチの人々の生活の状況と福祉政策を取り扱う。両国の生活保障制度をウェルフェア・ミックスの考えをもとに分析し、貧困の度合いや暮らしを保障する制度に大きなちがいがみられることが明らかにされる。第5章「国際関係—イスパニョーラ島の分断と大国との関係—」は、イスパニョーラ島のなかにハイチとドミニカ共和国という二つの国が存在している理由を歴史的に明らかにするとともに、イスパニョーラ島と米国との間で問題となっている移民、麻薬問題、国際援助について分析する。移民については、米国への両国の移民問題と、ハイチからドミニカ共和国への移民について、とくに後者についてはレイシズムと反ハイチ主義を軸に論じる。最後に終章では各章で明らかにされた議

論をまとめ、今後の研究課題について考察する。

なお、総合的地域研究もしくは中南米地域研究の一事例として本書を講義で使うためには別の順番で読むことも可能である。まず、第4章で両国での人々の暮らしぶりを把握し、つぎに、暮らしの経済的基盤を理解するために第3章を読み、政治的な基盤を理解するために第2章を読むといいだろう。そのうえで、両国のちがいの原因を歴史的に理解するために第1章を読むと理解が深まる。最後に、両国を取り巻く国際関係を第5章で把握するという読み方も可能である。国際協力や国際援助に関心のある読者もこの順番の読書を試してみたい。

〔参考文献〕

<日本語文献>

ジェームズ, C.L.R. 2002. 『ブラック・ジャコバン——トゥサン＝ルヴェルチユールとハイチ革命——』大村書店.

ダイヤモンド, ジャレド 2012. 『文明崩壊』楡井浩一訳 草思社.

ラフェリエール, ダニール 2011. 『ハイチ震災日記』立花英裕訳 藤原書店.

<外国語文献>

Diamond, Jared 2010. "Intra-Island and InterIsland Comparisons." In *Natural Experiments of History*, edited by Jared Diamond and James A. Robinson. Cambridge and London: Harvard University Press, 120-141.

Diamond, Jared and James A. Robinson, ed. 2010. *Natural Experiments of History*. Cambridge and London: Harvard University Press.

Diederich, Bernard 2008. *Haiti's Bon Papa. Haiti's Golden Years, 1950s*. Port-au-Prince: Editions Henri Descamps.

Freedom House 2015. "Freedom in the World 2015." (https://freedomhouse.org/sites/default/files/01152015_FIW_2015_final.pdf)

